



北前船主の館右近家

江戸中期から明治30年代にかけて、上方（大阪）から蝦夷地（北海道）を結んで日本海廻りで、各港で買積（高い）をしながら不定期に往復した廻船を北前船と呼びました。河野浦では1729（享保14）年に36隻もの船があったというほど活気づいていました。北前船船主の中でも大きな成功を収めたのが日本海五大船主に数えられた右近家です。



河野浦は敦賀湾の入り口に位置し、越前西街道（馬借街道）を通じ国府と直結する港であったことから、物資輸送の中継地として栄えた集落です。しかし、甲斐城断層に位置するため、地形上田畑の栽培や船溜の余地も無く、敦賀や小浜の船主に雇われる渡海船稼ぎを唯一の業としていました。江戸時代に入ると、近江商人の積み荷を運ぶ「荷所船」の船主となり、やがて近江商人に代わり、蝦夷地（北海道）まで自ら商品を仕入れ販売する買積（高い）をする北前船主として活躍しました。幕末から明治初期にかけては、正に海運



荒波を越えた男たちの 夢が紡いだ異空間

（北前船寄港地・船主集落）

日本海沿岸には、山を風景の一部に取り込む港町が点々とみられる。そこには、港に通じる小路が随所に走り、通りには広大な商家や豪壮な船主屋敷が建っている。これらの港町は、荒波を越え、「動く総合商社」として巨万の富を生み、各地に繁栄をもたらした北前船の寄港地・船主集落で、時を重ねて彩られた異空間として今も人々を惹きつけてやまない。

平成29年4月28日、日本海沿岸に点在する7県11市町の異空間をつなぐ歴史ストーリー「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」北前船寄港地・船主集落」が日本遺産に選ばれました。

「日本遺産」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語る「ストーリー」を文化庁が認定するものです。地域に

点在する魅力ある有形・無形の文化財群を一体的に整備・活用し、発信することで地域の活性化を図るために平成27年度に制度化されました。

町は、昭和62年から旧河野村が始めた「北前船の歴史むらづくり」事業を受け継ぎ、北

前船という歴史的文化遗产の活用により地域の活性化を目指してきました。平成2年に、日本海五大船主の右近家の隆盛を物語る資料館「北前船主の館右近家」を一般公開、平成3年からは、北前船の「西廻り航路フォーラム」を開催（これまでに8回実施）するなど、北前船が残した文化・歴史を発掘・保存し、

を専業とする船主をはじめ船頭や船乗りの居住集落となりました。

交流と発信を図ってきました。また、平成25年度には北前船歴史空間再生プロジェクト事業で、河野北前船主通りなどの景観整備や観光ガイドの育成等を行い、観光客へのおもてなしの充実に努めてきました。さらに平成28年度には、江戸時代から明治時代にかけて日本海の手廻りで活躍した「北前船」をテーマに、文化庁の「日本遺産」登録を目指す全国の関連自治体による北前船寄港地日本遺産登録推進協議会に参画し、11自治体が連携して2月に申請をしました。

蝦夷地（北海道）から上方（大阪）に向かう「上がり荷」では、北海道産物（ニシン、昆布など）を運びました。中でも、ニシンは、農業肥料として用いられたため、大きな利益を上げました。一方、北海道に向かう「下り荷」は、生活必需品（砂糖、醤油、衣料品など）を大阪や各寄港地で買い入れながら運びました。また、笏谷石（福井市で採掘）が、船のバランスを保つために不可欠なものとされ、商品を兼ねて運搬されました。

